

## II-2 東京都 レジューメ

### 幼児の内発性と創造性に関する一研究

—ライトテーブル及び OHP などを使用した遊びを中心として—

東京都 やはた幼稚園

発表者

- ・ 園 長：関 政子
- ◎ 副園長：関 龍太郎（アトリエリスタ）
- ・ 教 諭：川島 久美子（年長組担任）
- ・ 劇団角笛：白石 奈美（影絵担当）
  
- ・ 共同研究者：浅見 均 青山学院女子短期大学特任教授（ペダゴジスタ）

◎＝主発表者

#### I 研究動機

本研究は、ライトテーブル、OHP などを使用した本園の遊びのプロジェクト「光と陰」を手掛かりに研究を行ったものである。研究体制は、保育者、アトリエリスタ、影絵劇団員、共同研究者（ペダゴジスタ）からなる。プロジェクトは主に本園多目的ルームに設置したミニアトリエにて行ったもので、上記の機器の他に色付きアクリル製透明積み木や、セロファンや紙、パッキン材を含む透明、半透明、不透明のマテリアル、自然物（貝殻、木片など）、布、レースなどが用意されており、子ども達にとって新奇で魅力的な空間となっている。そこにおいて子どもたちはどのように内発的な行為としての遊びを展開、創造して行くのかということ、つまり子どもの内発性（自らやってみたいという心）が芽生え、遊びが創造されていくのかということに着目した研究である。

#### II 研究の期間及び対象

期間： 2020年11月から2021年3月まで

対象：やはた幼稚園年長組園児

### Ⅲ 研究の方法

やはた幼稚園多目的ルーム内ミニアトリエにおいて、今まで幼児が使用したことのない機材として、ライトテーブル、OHP、プロジェクター、ミラーテーブル、スクリーンなどの機器と、マテリアルとして様々な透明、半透明なも、懐中電灯、貝やヒトデ、木の削り屑、松ぼっくりなどの自然物、アクリル製の透明カラー積み木、油性ペン、色付きセロファン、布、レースなどを遊びの進行状況によって用意した。

それらの機材と、様々な子どもにとって興味深いマテリアルを使って遊ぶ子どもたちの様子を動画や写真に撮り分析を行った。

### Ⅳ 結果及び考察

ここではいくつかのエピソードを挙げ、そこから見えてきたものについて述べていく。

#### エピソード1 つき組とミニアトリエのつながり

11月、影絵の観劇に触発された子どもたちは、保育室で作ったものをミニアトリエで試すということが始まった。ここでは、影絵遊びに使うペープサートづくりから影絵劇遊びへと発展する様子と、切り紙からステンドグラスづくりへ発展した。そしてそれらはミニアトリエへとつながり、遊びが発展し、様々な気づきが見られた。その遊びの様子を、内発性と創造性の観点より考察した。

#### エピソード2 新奇な素材としてのアクリル製透明カラー積み木との出会い

2月になり、マテリアルにアクリル製透明カラー積み木が追加された。子どもたちは、今まで出会ったことのない透明カラー積み木を使用して様々な試しを行いながら遊びを楽しんだ。その遊びの様子を、内発性と創造性の観点より考察した。

#### エピソード3 いつものお絵かきが面白い

11月～、ミニアトリエには白色公のライトテーブルと色の変化するライトテーブルが設定されている。そこにおいて、子どもたちは、水性ペンで絵を描くことに興味を持った。そこで絵を描くと、いつもの絵が、下からの光で綺麗に映し出される。また、色の変化するライトテーブルでは絵の色によって消えたり浮かび上がったりする。更に遊びは発展し、重ねることによって絵が変化することに興

味を持ち始める。これらのエピソードを内発性と創造性の観点より考察した。

#### **エピソード4** S児における遊びの変容

3月になり、一人一人の遊びが深まり、集中して遊ぶ姿が見られるようになった。ここでは、一人の園児Sに焦点を当て、およそ7分間の中での遊びの変容を分析し、内発性と創造性の観点より考察した。

## V 結論

レッジョ・エミリア市の幼児教育の魅力的な実践にインスパイアされ、本園でもライトテーブル、OHP、プロジェクター、ミラーテーブル、様々なマテリアルを保育環境として導入、実践する中で様々なことが見えてきた。

本研究では、内発性（内発的動機付け）つまり子ども自らが、面白そう、やってみたいと思えるような心が芽生えるような環境になりうるのではないかと、そしてその遊びは創造的な遊びとなるのではないかとといった仮説を立ててみたのであったが、子どもたちは見慣れた環境より少し新奇で、少しズレた情報としての環境に対して興味を持ち、様々な遊びを展開した。また、その遊びの内容は、今まで経験したことのないものであったため、より創造的な遊びとなった。

これらの研究結果が示唆するものは、保育環境においては、今子どもが興味を持っているものなどから少し新奇なものを環境として用意することによって、子どもの遊びは深まり、また創造的な活動になっていくということであった。

## 参考文献

- ・深田昭三他「ライトテーブルを用いて幼児の創造的なアート表現を育む」『愛媛大学教育学部紀要 第64巻』2017年
- ・淀澤真帆・中坪史典「レッジョ・エミリアの幼児教育から読み解く日本の『環境を通じた教育』」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第66号』2017年
- ・富貴田智子「プロジェクト活動を通じた子どもの自律性・共同性が育つ過程の検討ーレッジョ・エミリア・アプローチによる実践例を用いて」『愛知江南短期大学紀要 43』2014年
- ・ハント著 宮原英種・宮原和子共訳『乳幼児教育の新しい役割』新曜社 1978年

ほか